

# ラオディキア - ナンバー・フォー

## 重なり合う歴史

Jeff Pippenger

2023-09-01

私が指摘した点は、スティーブン・ハスケルはおそらくそれを見ていなかったものの、その事実を明るみに出す諸真理を認めていたことによって間接的にはそれを支持していた、ということである。すなわち、古代イスラエルの終わりの歴史の中に、同じ歴史的期間に重なって現代イスラエルの始まりが同時に見いだされるという点である。キリストが一週（二千五百二十日）のあいだ多くの者と契約を堅くしておられた時、古代イスラエルはラオデキアの経験を生きており、主の御口から吐き出される寸前にあった。同時に現代イスラエルはエペソの経験を生きていた。古代イスラエルのラオデキアは散らされつつあり、現代イスラエルのエペソはまさに同じ歴史の中で集められつつあった。

そして、もしあなたが気になっているなら「はい」、私は、ダニエル書9章の成就としてキリストが契約を堅く結ばれたその一週が、バプテスマに始まりステパノの石打ちで終わったこと、そしてそれが文字どおりの二千五百二十日ではなかったことを承知しています。しかし預言的にはまさしくそうであり、というのも預言において一年は三百六十日に等しいからです。三百六十日に七を掛けると二千五百二十日となり、その預言的な一週の「ど真ん中」は十字架です。預言的に言えば、キリストは二千五百二十日の預言期間のど真ん中に十字架を置かれました。こうしてレビ記26章の「七たび」が、キリストの十字架によって確立され、支持されていることが示されます。これは偶然ではありません。ホワイト夫人が、実際にそう教えているとおり、ハバククの聖なる二つの図表、すなわち1843年と1850年の図表のいずれにも、その図表のまさに中心に二千五百年の預言があり、しかも両方の図表では十字架がその図のど真ん中に置かれているのです。

聖書には、この世の生活にも来るべき世の生活にもふさわしい者とされるために、人が理解すべきすべての原則が含まれている。そして、これらの原則はだれにでも理解できる。聖書の教えを受け止める心のある人は、聖書のひとつの箇所を読むにしても、そこから何かしら助けとなる思いを得ないではいられない。だが、聖書の最も価値ある教えは、たまの、あるいは断片的な学びによっては得られない。その壮大な真理の体系は、せっかちに、またはおろそかに読む者に見いだせるようには示されていない。その宝の多くは表面のはるか下にあり、丹念な探究とたゆまぬ努力によってのみ得られる。大いなる全体を形づくる真理は、探し求めて拾い集めなければならない。「ここに少し、あそこに少し」。イザヤ書 28:10

このようにして探し出して集めるなら、互いに完全に適合していることがわかるだろう。各福音書は他の福音書の補足であり、すべての預言は別の預言の解明であり、あらゆる真理は他のある真理の展開である。ユダヤの経綸の型は、福音によって明らかにされる。神の言葉にあるすべての原則にはそれぞれの位置があり、あらゆる事実はそれぞれの意義がある。そして、その全体としての構造は、その構想と遂行において、その作者を証言している。このような構造を構想し形作ることができるのは、無限者の知性以外にはない。Education, 123.

七つの教会のそれぞれがミラー派の歴史、そして私たちの歴史の中でも繰り返されるといふ原則と並んで、初期アドベンチズムが認めていたもう一つの重要な原則がある。その原則は、同一の歴史に属する「内的」と「外的」の預言的な系列が、真理を伝えるために聖霊によって用いられていることを示している。ミラーはこれを認識し、直接教えた。彼は、黙示録の七つの封印が七つの教会に並行する歴史を表していると正しく教えたが、その並行的な図式においては、封印は外的な真理を、教会は同一の歴史の内的な真理を表す。ユライア・スミスもこの原則に言及し、「内的」と「外的」という語を用いているが、これは二つの並行する系列を表現する最善の言い方だと私には思われる。

封印は、黙示録4章、5章、6章において取り上げられている。これらの封印のもとで示される光景は、黙示録6章と8章1節で描かれている。それらは明らかに、この時代の始まりからキリストの来臨に至るまで、教会に関係する出来事を含んでいる。

「七つの教会は教会の内的歴史を示す一方、七つの封印はその外的歴史の重大な出来事を明らかにする。」ユライア・スミス『The Biblical Institute』253。

これから七つの教会の考察を始める。最初の二つの教会、そして第三と第四の教会は、それぞれ「因果関係」にあり、ゆえに一緒に考える必要があることを認識しておくことが重要である。スミルナはローマによって迫害される人々を代表する教会であり、エペソは福音を全世界に伝えた教会であった。

弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれたのはアンティオキアであった。その名が彼らに与えられたのは、キリストが彼らの説教と教え、そして会話の中心的主題であったからである。彼らは、主の地上での奉仕の日々、すなわち弟子たちが主のご臨在の恵みにあずかっていた時に起こった出来事を、絶えず繰り返し語っていた。彼らは飽くことなく、主の教えと癒しの奇跡について語り続けた。彼らは唇を震わせ、目に涙を浮かべながら、園での苦悶、裏切り、裁判、そして処刑のこと、敵から加えられた侮辱と拷問にどれほどの忍耐とへりくだりをもって耐えられたか、さらにご自身を迫害する者たちのために祈られた神のごときあわれみについて語った。主の復活と昇天、そして墮落した人間のための仲保者として天において行っておられる働きは、彼らが喜んで思いを注いで語り続けた主題であった。彼らがキリストを宣べ伝え、またキリストを通して神に祈りをささげていたのだから、異教の人々が彼らをキリスト者と呼んだのももっともであった。

彼らにキリスト者という名を与えられたのは神であった。これは高貴な名であり、キリストに連なるすべての者に与えられる。この名について、のちにヤコブはこう書いた。「富む者たちはあなたがたを虐げ、法廷に引き立てはしないか。彼らは、あなたがたがその名によって呼ばれているあの尊い名を、冒瀆してはいないか。」ヤコブの手紙 2:6, 7。またペテロはこう宣言した。「もし誰かがキリスト者として苦しむなら、その人は恥じてはならない。むしろ、このことについて神をあがめなさい。」「もしあなたがたがキリストの名のためにののしられるなら、あなたがたは幸いである。というのは、栄光の御霊、すなわち神の御霊があなたがたの上にとどまっているからである。」第一ペテロ 4:16, 14。使徒行伝、157。

エペソの教会は、「キリスト・イエスにあって敬虔に生きた」初代教会を象徴しており、それは常に「結果」を生み出す「原因」である。

確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようとする者は皆、迫害を受けます。  
テモテへの手紙第二 3章12節。

エペソの教会の敬虔さが、スミルナの教会に表されている迫害をもたらした。両教会は原因と結果の関係を表しており、結果には必ずそれに先立つ原因がある。日曜法危機における迫害は、ホワイト姉妹が「原始的敬虔」と呼ぶものの現れによって引き起こされる。これは、過去、すなわち原始の歴史において例証されてきた敬虔さである。

信仰と敬虔が広く衰退しているにもかかわらず、これらの教会にはキリストの真の信徒がいる。神の裁きが地上に最終的に臨む前に、主の民の間には、使徒時代以来目にしたことのない初期の敬虔さの復興が起こるだろう。神の御霊と御力がその子らの上に注がれる。その時、この世への愛が神とその御言葉への愛に取って代わってしまった教会から、多くの者が離れるようになる。主の再臨に備えるためにこの時神が宣べ伝えさせておられるその大いなる真理を、聖職者も平信徒も多くが喜んで受け入れるだろう。魂の敵はこの働きを妨げたいと望み、そのような運動の時が来る前に、偽物を持ち込んでそれを阻止しようとする。彼がその欺きの力のもとに置くことのできる教会では、神の特別な祝福が注がれているかのように見せかけ、大いなる宗教的熱心が現れているように見えるだろう。実際には別の霊の働きであるのに、神が自分たちのために驚くべき御業をなしておられるのだと大勢の人々は歓喜する。宗教の装いで、サタンはキリスト教界への影響力を広げようとするだろう。The Great Controversy, 464.

「終わりの時」の「真夜中の叫び」は、その箇所を示されている「原始的な敬虔さ」の復興である。それは教会ではなく、運動の中で起こる復興である。その復興を記述するためにホワイト姉妹が用いる歴史は、「使徒時代」の歴史であり、それはエペソの教会によって表されている。その復興は「迫害」をもたらす。

「多くは投獄され、多くは命からがら都市や町から逃げ出し、また多くは、真理を擁護して立つがゆえにキリストのために殉教者となるだろう。」『Selected Messages』第3巻、397ページ。

次の箇所にある「地上でのキリストの生涯」は、エペソ教会の始まりを表しているが、同時に、世の終わりにおけるラオデキア的アドベンティズムの歴史も象徴している。

「裁きは退けられ、正義は遠くに立ち、広場では真理が倒れ、公平は入ることができない。まことに、真理は失せ、悪を離れる者は自ら餌食となる。」イザヤ書59章14、15節。これは地上でのキリストの生涯の中で成就した。彼は神の戒めに忠実であり、その代わりに高く掲げられていた人間の伝統や規定を退けた。このために彼は憎まれ、迫害された。「この歴史は繰り返される。」『キリストの実物教訓』170頁。

エペソに象徴される経験は、ラオディキアに象徴される経験と同時に生じる。難癖をつけるユダヤ人は古代イスラエルのラオディキア人であり、キリストとその弟子たちは現代イスラエルのエペソ人であった。バプテスマのヨハネはエペソの教会を紹介し、彼は「終わりの日」の教会を代表するが、その教会は自称ユダヤ人だが実はそうではないラオディキア人によって反対される。

バプテスマのヨハネの働きと、終わりの日にエリヤの霊と力をもって人々を無関心から目覚めさせるために出ていく者たちの働きとは、多くの点で同じである。彼の働きは、この時代になされなければならない働きの型である。キリストは、義をもって世をさばくために、再び来られる。世界に与えられる最後の警告のメッセージを担う神の使者たちは、ヨハネがキリストの初臨のために道を備えたように、キリストの再臨のために道を備えなければならない。この備えの働きにおいては、「すべての谷は高められ、すべての山は低くされ、曲がった所はまっすぐにされ、険しい所は平らにされる」。歴史は繰り返され、もう一度「主の栄光が現れ、すべての人がともにそれを見る。主の御口がこれを語られたからである」。

サザン・ウォッチマン、1905年3月21日

エペソは「原因」で、スミルナは「結果」である。ペルガモとテアテラもまた因果関係を表している。ペルガモは、キリスト教と異教を混合することでキリスト教を墮落させた妥協の教会である。キリスト教会は、異教の偶像崇拜が自らの内部で共存し得るという前提を受け入れたときに墮落した。コンスタンティヌス帝はその妥協の歴史の象徴であり、彼の預言的役割は、教皇制が現れる前に真のキリスト教の背教をもたらすことだった。

だれにも、どんな手段によっても、だまされてはなりません。なぜなら、その日は、まず背教が起こり、滅びの子である罪の人が現れるまでは来ないからです。彼は、神と呼ばれるもの、あるいは礼拝されるもののすべてに反対し、それらの上に自分を高く掲げ、ついには神であるかのように神の神殿に座して、自分が神であることを示します。私がまだあなたがたと共にいたとき、これらのことを話していたのを覚えていないのですか。そして今、彼が自分の時に現れるように、何が彼を押しとどめているのかを、あなたがたは知っています。不法の秘密はすでに働いています。ただ今は、押しとどめている者が、やがて退けられるまで、それを押しとどめています。そしてそのとき、あの不法の者が現れるでしょう。主はその口の息をもって彼を滅ぼし、ご自身の来臨の輝きによって彼を打ち滅ぼされます。テサロニケ人への第二の手紙 2章3-8節

ペルガモの教会が「原因」で、テアテラが「結果」であった。預言者ダニエルは、異教が教皇主義に道を譲っていく歴史をしばしば描いており、パウロが指摘した教皇制の確立に先立つ背教はダニエル書11章で取り上げられている。

キツテムの船が彼に向かって来るので、彼は落胆して引き返し、聖なる契約に対して怒りを燃やす。彼はそのように行い、さらに引き返して、聖なる契約を捨てる者たちと通じる。軍勢が彼の側に立ち、彼らは砦の聖所を汚し、日ごとのささげ物を取り除き、荒廃をもたらす忌むべきものを据える。ダニエル書 11:30-31。

教皇権が歴史の中に現れる以前に背教した妥協の教会は、ダニエルによって「聖なる契約を捨てた者たち」として表されている。彼らとその契約を捨てた後、ダニエルが「荒廃をもたらす憎むべきもの」として表す教皇権が地の王座に据えられた。ホワイト姉妹は「ダニエル書11章の預言は、ほとんど完全な成就に達している」と述べ、ダニエル書11章の最後の6節を指し示している。最後の6節はダニエル書11章の最終的な成就であり、彼女は、その最後の節々によって表される歴史はダニエル11章30~36節によって予型化されており、そこにはペルガモとテアテラによって表される歴史的な「因果関係」が示され

ていると教えている。

私たちには一刻の猶予もない。私たちの前には苦難の時代が待ち受けている。世界は戦争の機運にかき立てられている。まもなく、預言で語られた苦難の光景が現実となるだろう。ダニエル書11章の預言は、ほぼ完全な成就に至ろうとしている。この預言の成就として起こった多くの歴史的出来事は、再び繰り返されるだろう。

第30節では、「30節から36節引用」とある力について語られている。

「これらの言葉に描かれているのと似た光景が起こる。」Manuscript Releases, 第13号, 394.

ペルガモとテアテラの因果関係、ならびにエペソとスミルナの因果関係は、「終わりの時代」に繰り返される。アメリカ合衆国のプロテスタントは、ペルガモに象徴されるように（偶像崇拜の最たるしるしは太陽崇拜である）、偶像崇拜と妥協し、彼らが背教するとき、「罪の人」が再び預言的に現れるための道が備えられる。背教と教皇権を王座に据えることが繰り返される一方で、神は同時に、エペソを型とする教会を興してダニエル書と黙示録のメッセージを世界に伝えさせ、スミルナに象徴される迫害も繰り返される。

私たちが、黙示録の最初の四つの封印は最初の四つの教会によって表される内的な真理の系統に並行する外的な真理の系統であるという真理を考察したのちに、私は最後の三つの教会について論じます。すでに述べたように、ユライア・スミスはこれを次のように述べています。

「七つの教会は教会の内的歴史を示す一方、七つの封印はその外的歴史の重大な出来事を明らかにする。」ユライア・スミス『The Biblical Institute』253.

私たちは、最初の四つの教会が「終わりの日」に繰り返される二つの「因果関係」を表していることを示してきた。アドベント主義の先駆者たちに基づき、しかしそれ以上に神の御言葉の權威に基づいて、教会のそれら四つの内的歴史には、最初の四つの封印によって表される並行する外的歴史が対応しているはずである。第一と第二の封印はエペソとスミルナの同じ特質を反映しているが、キリスト教を世界に伝える働きを表すのに白い馬を用いている。これは教会の外的な働きを表しており、また第二の封印は赤い馬によってスミルナの流血の迫害を表している。

そして私は見た。子羊が封印の一つを開いたとき、私は、あたかも雷鳴のような声で「来て、見よ」と言う四つの生き物の一つの声を聞いた。私は見た。見よ、白い馬が現れた。その上に座っている者は弓を持ち、冠が彼に与えられ、彼は勝ち進み、なお勝つために出て行った。子羊が第二の封印を開いたとき、私は第二の生き物が「来て、見よ」と言うのを聞いた。すると、もう一頭の赤い馬が出て来た。その上に座っている者には、地から平和を取り去り、人々が互いに殺し合うようにさせる權威が与えられ、また彼には大きな剣が与えられた。黙示録 6:1-4

ゼカリヤ書には、黙示録の最初の四つの封印に表されている四頭の馬を明確に指し示す箇所がいくつかある。そうした箇所の一つである10章では、後の雨が注がれるとき、神の「家」である「ユダの群れ」が「戦いにおける彼の立派な馬」に変えられるとゼカリヤは述べている。

後の雨の時に、主に雨を求めよ。そうすれば、主は輝く雲を起し、彼らにわか雨を与え、すべての人に野の青草を与えられる。偶像はむなしいことを語り、占い師は偽りを見、偽りの夢を告げた。彼らの慰めはむなしい。それゆえ彼らは群れのようにさまよい、牧者がいないために苦しめられた。わたしの怒りは牧者に対して燃え上がり、わたしは雄山羊を罰した。万軍の主が、その群れであるユダの家を顧み、彼らを戦いの中でご自分の立派な軍馬のようにされたからである。ゼカリヤ書 10:1-3。

エレン・ホワイトは、ペンテコステにおける聖霊の注ぎが、今まさに降っている後の雨を象徴していると繰り返し指摘している。ペンテコステで世界のためになされた働きはエペソの教会によって表され、また、エペソはスミルナに象徴される迫害を引き起こし、その迫害をヨハネは第二の封印の「赤い馬」として描いている。最初の二つの封印は最初の二つの教会と並行しており、後の雨が注がれている「終わりの日」を描写している。

預言の霊はまた、第三の封印の終わりと第四の封印の始まりの双方を取り上げ、（因果関係として）それらを結びつけている。そして、そのことによって、彼女は、示されている歴史を、彼女の時代と「終わりの日々」に存在するものとして位置づけている。

「今日、黙示録6章6～8節に表されているのと同じ精神が見られる。歴史は繰り返される。すでにあったことが再び起こる。」 Manuscript Releases, 第9巻, 7.

シスター・ホワイトの私史（1898年執筆）において、ローマ教皇制が再び即位するための道を整える妥協の精神はすでに健在であった。というのも、1844年春の第一の天使のメッセージの拒絶に始まるプロテスタンティズムの背教は、1863年にはすでにプロテスタント・アドベンティズムの角にまで侵食し始めていたからである。

ペルガモスの妥協は、第三の封印において「一対」の天秤として表されている。二つの計量用の天秤は、不正な計量を表す。第三の封印は第四の封印へとつながり、第四の封印は「死」の「蒼ざめた馬」によって表され、暗黒時代における教皇制による何百万人もの殺害を表している。「地獄」は、教皇制の蒼ざめた馬の後に続くものである。第三と第四の封印の歴史は、ペルガモスとテアテラの教会の歴史と並行している。コンスタンティヌスの妥協は漸進的な過程であった。したがって、パウロが「不法の奥義はすでに働いている」と言った時代と同様に、シスター・ホワイトの個人的な歴史においても、妥協の霊はすでに働いていた。教皇制の即位に先立つ背教は、常に漸進的な歴史であり、そして「歴史は繰り返される。かつてあったことが、再び起こる。」

そして、私は四つの獣のただ中からこう言う声を聞いた。「小麦一掬が一ペニー、大麦三掬が一ペニー。油とぶどう酒には害を与えるな。」そして彼が第四の封印を解いたとき、私は第四の獣の声が「来て見よ」と言うのを聞いた。そこで私は見た。見よ、蒼ざめた馬がいた。その上に座る者の名は死で、陰府が彼に従っていた。彼らには地の四分の一の上に権威が与えられ、剣と飢えと死と地の獣どもによって殺すことが許された。黙示録 6:6-8。

ジェームズ・ホワイトは、七つの教会と七つの封印に、別の預言的な特異性を見いだした。彼は、最初の四つの教会と最後の三つの教会の間に意図的な区別があることを指摘し、さらに、最初の四つの封印と最後の三つの封印にも同じ現象が見られると指摘している。

私たちはこれまで、同じ時期を覆っていると比較しうる範囲で、教会、封印、そして獣、すなわち生ける者をたどってきた。封印は七つであるが、獣は四つにすぎない。そしてここで注意しておきたいのは、第一、第二、第三、第四の封印が開かれるときには、第一、第二、第三、第四の獣が「来て見よ」と言うのが聞かれるが、第五、第六、第七の封印が開かれるときには、そのような声は聞かれないということである。また、最後の三つの教会と最後の三つの封印は、最初の四つの教会と最初の四つの封印がそうであるようには、同じ時期を覆っているといっただけ対応させることはできない。しかし、これまで示してきたとおり、教会、封印、そして獣は、ほぼ1800年のあいだ、現在に至るわずか半世紀余り前の時点にまで、同じ時期を覆っているという点で一致している。ジェームズ・ホワイト『レビュー・アンド・ヘラルド』1857年2月12日。

ジェームズ・ホワイトは、ラッパにも同じパターンが存在するという事実には言及していないが、確かに存在する。最初の四つのラッパはラッパとして語られているが、最後の三つのラッパは三つの「災い」とされている。最初の四つのラッパは、321年のコンスタンティヌスによる日曜法に対する異教ローマへの神の裁きを表し、三つのラッパの災いはイスラムを表している。最初の二つのラッパの災いは、538年に教皇ローマが制定した日曜法に対する、同ローマへの裁きであり、第三のラッパの災いは、ごく近い将来にやって来る日曜法の危機に対するものである。

ジョセフ・ベイツは、最後の三つの教会に関する初期の先駆者たちによる理解を、ミラー派の時代における三つの同時代の教会を表す単一の象徴として用いている。本文中の強調はすべてベイツによるものである。

「全地において、と主は言われる。そこでは三分の二は断ち切られて死に、しかし三分の一はそこに残される。神はその三分の一を火の中を通らせ、彼らを精錬すると言われる。彼らは主の名を呼び、主は彼らに答える。主は『これはわたしの民だ』と言い、彼らは『主はわたしの神である』と言う。」

第一の部分、サルディス-名目上の教会、すなわちバビロン。

第二の部分、ラオデキヤ-名目上のアドベンチスト。第三の部分、フィラデルフィア-地上における神の唯一の真の教会。彼らは神の都へ移されることになっているからである。黙示録3:12;ヘブル12:22-24。イエスの御名によって、私は再びあなたがたに勧める。ソドムとゴモラから逃れるように、ラオデキヤ人から逃れなさい。彼らの教えは偽りで欺瞞的であり、全き滅びへと導く。死！ 死！！ 永遠の死!!!

が彼らの跡を追っている。ロトの妻を思い出しなさい。

ジョセフ・ベイツ『レビュー・アンド・ヘラルド』第1巻、1850年11月。

ミラー派の歴史において、サルディスは、生きていと称される名を持ちながら、実は死んでいた教会であった。

サルデスにある教会の御使いに書き記せ。神の七つの御霊と七つの星を持つ方がこう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。あなたは生きているという名を持っているが、死んでいる。黙示録 3:1。

神の民には常に名がある。エペソからペルガモスに至る時代の名はクリスチャンであった。教皇支配の時代の名は荒野の教会であった。明けの明星ジョン・ウィクリフの登場以後の名はプロテスタントであった。1798年の終わりの時に、プロテスタントはすでにローマ

教会との交わりへの回帰を始めていた。そのときに必要だったのは、彼らが名乗っている名にもかかわらず、もはや選ばれた教会ではないという事実を明らかにする試しであった。1844年の春、彼らは、もはやキリストの契約の名を担う教会ではないことを明らかにするその試しに直面した。エリヤの物語は、この事実の非常に詳細な第二の証人を提供している。彼らが真の性質を現したとき、プロテスタントがバビロンの娘たちとなったことを示したのだと、当初ミラー派が見極めるのは困難であった。しかしミラー派はやがてまさにそのことを行い、第二の天使のメッセージの成就として、墮落したそれらの諸教会から魂を呼び出し始めた。ついで、ミラー派自身が自らの品性を現すことになる試しの過程があった。彼らはフィラデルフィアの者であったのか、それともラオデキヤの者であったのか。

フィラデルフィアの人々はキリストに従って至聖所に入り、そうすることを拒んだミラー派の者たちはラオデキヤ人の性格を表した。こうして、ベイツがこの三つの教会を同じ歴史の同時代として特定したことの論理が見いだされる。その歴史は十人の乙女のたとえの預言的構造の中で成就しており、靈感は、それが文字どおりに、すでに成就し、これからも成就することを私たちに教えている。

「マタイ25章の十人の乙女のたとえは、アドベンチストの人々の経験も示している。」 『大いなる論争』 393。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

最後の三つの教会は、ミラー派運動の外にいる人々をサルデスとして、運動の内にいる人々をフィラデルフィアかラオデキヤとして表している。これら三つの教会は黙示録3章に記され、最初の四つの教会は2章にある。したがって、ホワイト姉妹が黙示録3章の歴史に言及するとき、彼女はジョセフ・ベイツが先ほど挙げたのとまったく同じ教会を指している。

「ああ、なんという描写であろうか！ この恐るべき状態にある者がなんと多いことか。私はすべての牧師に、黙示録第3章を熱心に学ぶよう切に訴える。そこには終わりの時代の状況が描かれているからである。この章のすべての節を注意深く学びなさい。これらの言葉を通してイエスがあなたに語っておられるのだから。」 Manuscript Releases 第18巻、193頁。

ミラー派の歴史において並行して存在していた三つの教会は、アドベンチズムの終わりにも再現される。ジョセフ・ベイツはミラー派期の力学を見極め、サルデスをバビロンの娘たちと同定し、そこが第二の天使のメッセージの対象であるとした。彼が扱っていたのは、1844年10月22日にキリストに従って至聖所に入った小さな群れと、聖所から出ることを拒んだ人々との間の葛藤である。彼は、彼らが受け入れた暗闇からラオデキヤの人々を呼び出そうとしており、彼らのラオデキヤ的盲目の少なくとも一部は、ウィリアム・ミラーがラオデキヤ運動で指導的地位を占めていたという事実起因していた。これはフ

フィラデルフィアへのメッセージで示されているのと同じ葛藤である。

見よ、自分はユダヤ人だと言いながら実はそうではなく、偽りを言うサタンの会堂の者たちを、見よ、わたしは彼らを来させ、あなたの足もとにひれ伏させ、また、わたしがあなたを愛していることを彼らに知らせる。黙示録 3:9

宗教的危機は、常に二種類の礼拝者を生み出す。大失望の時がそうであったように、プロテスタントの外套は、彼らがローマへ回帰して正式にローマの娘となったため、サルデスから取り去られたばかりであった。その外套は次にミラー派アドベンチズムに渡されたが、ほどなくして一つの試練が生じ、自らを小さな群れと称する二つの集団を生み出した。真の群れと偽りの群れである。ベイツは、キリストに従って至聖所に入った小さな群れを代表した。彼の闘いの相手は、自分たちこそ小さな群れだと公言するラオデキア人であった。フィラデルフィア人として、ベイツの闘いはサタンの会堂、すなわち自分たちは神の民だと称しながら、偽りを言い、ユダヤ人ではない者たちとのものであった。

アドベンチズムの終わりにおいてそのたとえが最後に成就するとき、1989年の終わりの時に見過ごされた、選ばれた契約の民が存在するだろう。それは、預言的な歴史における終わりの時を表すキリストの誕生のときに、ユダヤ人の指導者層が見過ごされたのと同じである。キリストの歴史がエルサレムへの凱旋入城に達したとき、ミラー派時代の真夜中の叫びの歴史が予表された。啓示は繰り返し、十字架という道標を1844年の大失望と結びつけている。ユダはキリストの歴史におけるラオデキア人を表し、使徒たちはフィラデルフィア人であった。十字架の後の三年半の間、ベイツに代表されるフィラデルフィア人は、弟子イスカリオテのユダによって表された墮落した教会からラオデキア人を呼び出そうと試みた。

1989年、かつて選ばれた契約の民は、封印が解かれた光を退け、見過ごされた。2020年7月18日の第一の失望が到来したとき、以前は同じ運動に属しているように見えた者たちの間で、試練の過程が始まった。しかし、一方のグループはラオデキア人で、もう一方はフィラデルフィア人である。ユダが十字架の前にキリストを裏切るためサンヘドリンと三度契約を結んだように、2001年9月11日以後の歴史におけるラオデキア人は、悔い改める三度の機会を失うことになる。間もなく到来する日曜法の時に、ユダが木に吊られたのと同じほど確かに、ラオデキア人がフィラデルフィア人と分かつたれていることが明らかになる。毒麦が小麦からより分けられるのは収穫の時である。私たちはその収穫に急速に近づいている。

これらの真理は、私たちが「真理」を明らかにし確立しうる唯一の聖書的な方法論は「歴史主義」であると理解する意志を持つときにのみ認識される。真の方法論は、過去成就説、未来成就説、ディスペンセーションナリズム、ウォーク・イズム、文法的または歴史的な専門知識、あるいは多くのサタンの偽物のいかなる変種でもない。ジャン＝ジャック・ルソーという17世紀の哲学者に帰せられる、よく知られた言い回しがある。それはさまざまに言い換えられてきたが、その考えの要点は「誤りには多くの根があるが、真理にはただ一つしかない」ということだ。「真理」とは、アルファでありオメガであり、乾いた地から出た根のような方である。

御恵みの富の宝庫である聖書についても同様である。その真理の栄光は、天にまで高く、永遠を包み込むほどであるのに、悟られていない。人類の大多数にとって、キリストご自身は「乾いた地から出た根」のようであり、彼らはそのうちに「彼を慕うべき美しさ」を見ない。イザヤ 53:2。イエスが人々の間におられたとき、人間性のうちにおける神の啓示であったそのお方に向かって、律法学者とパリサイ人は言った、「あなたはサマリア人で、悪霊につかれている」。ヨハネ 8:48。弟子たちでさえ、心の利己心に目を曇らされ、彼らに父の愛を現すために来られたそのお方を理解するのに鈍かった。だからこそ、イエスは人々のただ中で孤独のうちを歩まれた。彼が完全に理解されたのは、ただ天においてのみであった。『山上の祝福についての考察』25頁。

現在私たちが共有している真理は、真理の成長が歴史を通じて漸進的であるという文脈の中で認識されなければならない、さらに重要なのは、私たちの真理理解がアルファとオメガ、すなわちイエスが物事の終わりをその始まりと同一視するという文脈に位置づけられなければならないということである。

第四の教会はテアテラであり、聖書の預言における第五の王国として教皇権が支配していた時代を表している。その時代は、荒野にいた教会が捕囚の状態にあった時期でもある。霊的バビロンによる霊的イスラエルの一干二百六十年に及ぶ捕囚は、文字通りのバビロンにおける文字通りのイスラエルの七十年の捕囚によって予表されていた。

「今日、神の教会は、失われた人類の救いのための神の御計画を、成就に至るまで推し進める自由を与えられている。幾世紀にもわたり、神の民は自由の制限に苦しんだ。純粋な福音の宣教は禁じられ、人間の命令に敢えて背く者には最も厳しい刑罰が科せられた。その結果、主の偉大な道徳的ぶどう園は、ほとんど人の手の入らない状態であった。人々は神の御言葉の光を奪われていた。誤謬と迷信の闇が、真の宗教の知識を消し去ろうとしていた。地上にある神の教会は、この容赦のない迫害の長い期間、捕囚の時代にバビロンで囚われの身となったイスラエルの子らと同様に、まさしく捕られの状態にあった。」『預言者と王』714ページ。

バビロンでの七十年の捕囚は、テアティラの教会によって表されている。テアティラの教会は、ペルガモが象徴する原因によって生み出された結果である。ペルガモは、偶像崇拝をキリスト教と結びつけた皇帝コンスタンティヌスによって象徴される。彼の偶像崇拝の象徴は太陽礼拝であった。テアティラに対応する七十年の捕囚について、古代イスラエルが捕囚とされた聖書的理由は、彼らの王たちが神の御言葉に真っ向から反して、周囲の偶像崇拝の国々と関係や同盟を結んだからである。神はイスラエルに、周囲の異教の国々と交わってはならないと繰り返し警告された。古代イスラエルに託されていたまさにその十戒は、偶像を拝むことを厳しく禁じている。主がホレブの洞穴でモーセの前を通り、その御性質を現されたとき、主は今言及しているこの警告を二度にわたって示された。

彼は言った。「見よ、わたしは契約を結ぶ。あなたの民すべての前で、わたしは驚くべきことを行う。それは全地にも、いかなる国にも、いまだ行われたことのないものだ。あなたがいるすべての民は主のわざを見る。わたしがあなたとともに行うことは恐るべきことだからである。きょう、わたしがあなたに命じることを守れ。見よ、わたしはあなたの前から、アモリ人、カナン人、ヘテ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人を追い払う。気をつけよ。あなたが行くその地の住民と契約を結ばないように。そうでないと

、それがあなたの中の罫となる。むしろ、彼らの祭壇を打ち壊し、彼らの像を砕き、彼らの林を切り倒せ。あなたはほかの神を礼拝してはならない。主は、その名が『ねたむ者』である主、ねたむ神だからである。その地の住民と契約を結ばないように。彼らが自分たちの神々に淫行し、その神々にいけにえをささげ、だれかがあなたを招き、あなたがそのいけにえを食べることのないように。また、あなたがその娘たちをあなたの息子たちにめとり、その娘たちが自分たちの神々に淫行し、あなたの息子たちにその神々に淫行させることのないように。」出エジプト記 34:10-16。

この箇所だけでも、神は古代イスラエルを二度警告しておられ、周囲の偶像礼拝の国々と契約を結んではならないという古代イスラエルへの命令については、ほかにも多くの聖書の証言がある。そうした妥協は、古代イスラエルが神とその神政を退けたことに始まった。彼らが王を求めたとき、神は彼らに王を持つことを許され、それ以後、ほとんどの王が、そして特に北の十部族のすべての王が、その命令を無視した。イスラエルが周囲の偶像礼拝の民から分離され、特別な民であるべきだとする原則は退けられ、その拒否は、のちにコンスタンティヌスが象徴することになるような妥協によって示された。ペルガモとコンスタンティヌスは、偶像礼拝を神の教会に持ち込んだイスラエルの王たちの反逆を表している。サウル王に始まる背教は、霊的バビロンへの捕囚に至るキリスト教会の背教を象徴していた。サウル王からバビロン捕囚に至るまでの聖史は、ペルガモの教会によって象徴される。その後の七十年の捕囚は、テアテラの教会に相当する。

エペソは、約束の地を征服しに向かう教会を象徴している。エペソは、モーセの時代と、イスラエルのエジプトの奴隷状態からの解放を象徴している。

「聖書は、この最後の世代のために、その宝を蓄え、ひとまとめに束ねてきた。旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会において、これまでも、そして今もなお、繰り返されている。」『セレクトッド・メッセージズ』第3巻、338、339頁。

エジプトからの解放によって表されている歴史は、終わりの時に繰り返される。ゆえにそれはミラー派の歴史においても繰り返された。だからこそホワイト姉妹は、その歴史に繰り返し言及してミラー派の歴史を描写している。彼女は、1844年の大失望を、紅海の前に立ち、背後からファラオの軍勢が迫ってきたときのヘブライ人の失望と重ね合わせている。彼女はまた、エジプトからの解放の歴史をキリストの時代と結び付ける。したがって、弟子たちが十字架で味わった失望は紅海での失望によって型示されており、それはまた1844年の大失望をも型どっていた。十字架での失望は、エペソの教会の始まりを表していた。古代イスラエルの初期、すなわちモーセの時代はエペソの教会によって表されており、それはまたキリストの時代における現代イスラエルの始まりの型でもあった。これら二つの歴史は、エペソの教会によって表されている。ここで私たちが明らかにしている真理は、長年にわたりフューチャー・フォー・アメリカによってしばしば公に提示されてきたものであり、私は単にその概観を述べているにすぎない。

キリストの歴史において、前の契約の選民が退けられつつある一方で、新しい契約の民が起こされつつあるのを見いだす。キリストの歴史は古代イスラエルの終わりであり、また、古代イスラエルの始まりであるエジプトからの解放の歴史においても、新しい契約の民のために、先に選ばれていた契約の民が退けられた。

キリストの歴史において、かつての選民はエルサレムの滅亡とともに紀元70年に最終的な結末に至った。初めにモーセの時代には、かつての選民は40年のあいだ荒野で死んでいき、ヨシュアとカレブは、約束の地へそのメッセージを運ぶように定められた新しい選民の代表となった。ちょうどエペソ教会の時代の使徒たちが福音を世界に運んだように。

古代イスラエルの始まりと終わり、さらに現代イスラエルの始まりは、いずれも、かつての選民から新たな選民への移行を示している。二人または三人の証言によって事は確立されるが、これら三つの証言はいずれも、以前の選民が離縁されたことを指し示し、また、初めであり終わりであられる方、すなわち初めから終わりを告げる方のしるしを帯びている。神が十四万四千人と契約を結ばれるとき、かつての選民は見過ごされることになる。神は混乱の神ではない。神は決して変わらず、そのみことばは決して失敗しない。

エジプトからの解放と、ヨシュアを通して神が成し遂げられた勝利は、エペソの教会によって表されている。しかし、エペソは最初の愛を失う運命にあった。ヨシュアが世を去ると、新しい世代が起こり、それはスミルナによって表される時代を画した。約束の地を一掃するというヨシュアの素晴らしい働きは、決して完全には成し遂げられなかった。民は自分たちに満足し、ヨシュアに与えられていたその働きを放棄したからである。彼らは最初の愛を失った。その時代は、イスラエルが神を退け、サムエルがサウルに油を注いで王としたときまで続いた。こうしてペルガモの教会の時代が幕を開けた。

そのメッセージは、小アジアの教会であるスミルナに、またキリスト教会全体にも、2世紀から3世紀にかけて届けられた。そこは、異教が世界における覇権を懸けて最後の抵抗を試みていた時代であった。キリスト教は驚くべき速さで広まり、ついには世界中に知られるようになっていた。ある者は心の回心によってキリストの信仰を受け入れ、またある者は提示された論証の力によって受け入れ、さらに別の者は、異教の大義が衰えつつあるのを見て、打算から勝つ見込みのある側に付いた。こうした状況は教会の霊性を弱めた。使徒時代の教会を特徴づけていた預言の霊は、次第に失われた。これは、それが委ねられた教会を信仰の一致へと導く賜物である。真の預言者がいなくなると、誤った教えが急速に広まり、ギリシアの哲学は聖書の誤った解釈をもたらし、キリストによってしばしば非難された古代のパリサイ人の自己義が、再び教会のただ中に現れた。コンスタンティヌスの治世に先立つ二世紀の間に、その後の二世紀で完全に発展することになる諸悪の基礎が築かれた。この時期、ローマ帝国の多くの地域で殉教が広く行われるようになった。いかに奇異に思えても、これは紛れもない事実である。それは、キリスト者と異教徒の間に存在していた関係の結果であった。

ローマ世界では諸民族の宗教は尊重されたが、キリスト者は一つの民族ではなく、蔑まれた民族の一分派にすぎなかった。ゆえに彼らが人々のあらゆる階層の宗教を非難し続け、秘密の集会を開き、最も身近な親族や親しい友人の慣習や実践からも完全に身を引いたとき、彼らは異教当局から疑いの目で見られ、しばしば迫害の対象となった。しばしば、支配者たちの心に反対の気運がないときでさえ、彼ら自身が迫害を招いた。この傾向を示すものとして、歴史はカルタゴの司教キプリアヌスの処刑の詳細を伝えている。彼の判決が読み上げられると、聞き入っていたキリスト者の群衆から「私たちも彼と共に死ぬ」という声が一斉に上がった。

自らキリスト者と称する多くの人々が死を甘受し、さらには不必要に政府の敵意を挑発したその精神は、おそらく、皇帝ディオクレティアヌスとその補佐役ガレリウスによる西暦303年の迫害勅令の発布に大いに関係していた。その勅令は全面的な性格を帯び、十年間にわたり、厳しさには多少の差があったが施行された。スティーブン・ハスケル『パトモスの預言者の物語』50、51頁。

スミルナは、主から叱責を受けない二つの教会の一つではあるが、歴史は、その時期に殉教した人々の中に、神からの衝動ではなく人間的な衝動に基づく動機を持った者たちがいたことを証言している。士師記はヨシュアの死を告げるところから始まり、この書の士師たちの歴史を特徴づける一つの節が書中で二度繰り返される。その節が二度目に引用されるのは、この書の最後の節である。この書の最初の節はヨシュアの終わりを示し、最後の節はその歴史を要約している。

さて、ヨシュアの死後、イスラエルの子らは主に尋ねて言った、「誰がまず私たちのために上って行き、カナン人と戦うべきでしょうか。」... そのころ、イスラエルには王がなく、人はそれぞれ自分の目に正しいと見えることを行っていた... そのころ、イスラエルには王がなく、人はそれぞれ自分の目に正しいと見えることを行っていた。士師記 1:1; 17:16; 21:25.

スミルナの歴史では、初めから終わりまで「自己」が主要なテーマであった。王がいなかったため、彼らは自分たちがしたいと思うことを何でもすることに決めた。導きの欠如こそが、ハスケルがスミルナの歴史に見いだしたものであり、それは預言の霊が働いていないことによって示されていた。両方の歴史において、導きの欠如が、人々が自分自身の動機に基づいて決断を下すことへの道を開いた。エペソはエジプトからの解放を表している。士師記に記録されている歴史はスミルナの教会に象徴されている。サウル王からバビロン捕囚までの時代はペルガモの教会に象徴され、バビロンでの捕囚はテアテラの教会に象徴されている。

先駆者たちが指摘した現象と一致して、教会・封印・ラッパには四と三の区分があり、古代イスラエルの歴史における最初の四つの教会はエジプトでの奴隷状態から始まり、バビロン捕囚で終わる。というのも、アルファでありオメガである方は、いつも終わりを初めと結びつけて示されるからである。現代イスラエルの歴史における最初の四つの教会は、ユダヤ人がローマの権威の下に置かれたところから始まり、これら四つの教会は、霊的なユダヤ人が千二百六十年間霊的ローマの支配下に置かれたことで終わる。

テアテラに続いたのはサルディスであり、テアテラによって象徴されるバビロン捕囚から脱したときに始まった。サルディスは、名は生きているというが、実際には生きていない教会であった。彼らの「生きている」という主張は偽りであった。興味深いことに、七つの教会のうち、定義を持たないのはサルディスという語だけである。歴史や聖句の文脈に基づいてサルディスに定義が割り当てられてきたが、その名の語源的な定義は存在しない。名はあるが、ないのである。

しかし第二の神殿は、その壮麗さにおいて第一の神殿に匹敵しなかった。第一の神殿に伴っていた神の臨在の目に見えるしるしによって聖別されることもなかった。その奉獻に際して超自然的な力の顕現はなかった。新しく建てられた聖所を満たす栄光の

雲も見られなかった。天から火が下って祭壇のいけにえを焼き尽くすこともなかった。もはや、至聖所のケルビムの間にシェキナがとどまることはなく、そこには契約の箱、贖いの座、証の板も見いだされなかった。ヤハウエの御旨を問い求める祭司にそれを知らせる天からの声も響かなかった。

バビロン捕囚の後、彼らはエルサレムと神殿を再建した。彼らは再び名を持った。というのも、神はご自分の名をエルサレムに置くと約束しておられたからである。だが、神の名はその御性質を表しており、御自身の臨在が欠けていることは、彼らがいのちを表す名を持ってはいても、実際には、いのちを生み出す臨在をもはや持っていないことを明らかにした。結局のところ、彼らが本当に持っていたのは、公言と見せかけだけだった。

サルディスにおける最後の声は、主の大なる恐るべき日の前に来るエリヤの到来を約束した。古代イスラエルにとって、エルサレムの滅亡こそが主の大なる恐るべき日であった。このゆえに、ホワイト夫人は、七つの最後の災いとして表されている主の大なる恐るべき日の例証として、紀元70年のエルサレムの滅亡を取り上げている。フィラデルフィアの教会は、荒野で叫ぶバプテスマのヨハネの声から始まり、こうしてウィリアム・ミラーの声を予表した。バプテスマのヨハネとウィリアム・ミラーの声は、すべてが大丈夫だと信じていたが、実際には何もかも誤っていた人々に、ラオデキアのメッセージを告げていた。バプテスマのヨハネもウィリアム・ミラーも、斧を木の根元に置いた。サルディスへのメッセージは、「サルディスにも衣を汚していない者が少数いる。彼らは白い衣を着てわたしと共に歩む。彼らはそれにふさわしいからである」というものだった。バプテスマのヨハネとウィリアム・ミラーは、サルディスに象徴される時代から出て、キリストと共に歩むにふさわしい者たちを代表している。

ウィリアム・ミラーが宣べ伝えた真理を受け入れるように、何千人もの人々が導かれ、エリヤの霊と力をもってそのメッセージを宣べ伝えるために、神のしもべたちが起こされた。イエスの先駆けであるヨハネのように、この厳粛なメッセージを説いた人々は、斧を木の根元に置き、人々に悔い改めにふさわしい実を結ぶよう呼びかけねばならないと感じた。彼らの証言は、教会を目覚めさせて強く感化し、その真の性格を明らかにするようなものであった。そして、やがて来る怒りから逃れよという厳粛な警告が響かされると、教会に連なっていた多くの者がその癒しのメッセージを受け入れ、自らの背信を悟り、悔い改めの苦い涙と魂の深い苦悩をもって、神の前にへりくだった。そして神の御霊が彼らの上にとどまると、彼らもまた「神を恐れ、その栄光を彼に帰せよ。彼の裁きの時が来たからである」という叫びをともに響かせた。『初期の著作』233頁。

黙示録の七つの教会は、使徒の時代からキリストの再臨に至るまでの歴史を表しており、また、七つの教会は、預言者モーセからキリストの初臨に至るまでの古代イスラエルの歴史も表している。

イスラエルの子らが受けた試練と、キリストの初臨直前の彼らの態度は、キリストの再臨前に神の民が経験する状況を例証している。

サタンのはたらきは、私たちに対しても、イスラエルの子らがカナンへの地に入る直前に彼らに仕掛けられていたのと、まさしく同じように仕掛けられている。私たちは、その民の歴史を繰り返している。

彼らの歴史は私たちへの厳粛な警告となるべきである。主がご自分の民に光をお与えになるとき、サタンが平然と傍観し、彼らがそれを受けるのを妨げようとしなないなどは、決して期待してはならない。自分たちの気に入る形で来ないからといって、主が送られる光を拒むことのないよう、注意しよう。……もし自らその光を見て受け入れない者がいるなら、彼らは他の人の妨げとなってはならない。

「きょう、あなたがたに対して、天と地を証人に立てる。わたしはあなたの前に命と死、祝福と呪いを置いた。だから、命を選びなさい。そうすれば、あなたもあなたの子孫も生きることができる。あなたがあなたの神、主を愛し、その声に聞き従い、彼に固く結びつくためである。彼こそがあなたのいのちであり、あなたの命の長さだからである。こうして、主があなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた地に、あなたが住むことができる。」

この歌は歴史的なものではなく、預言的なものだった。過去に神がご自分の民になされた驚くべき御業を物語りながら、将来の大いなる出来事、すなわちキリストが力と栄光をもって再臨されるときに忠実な者たちが得る最終的な勝利をも予示していた。

使徒パウロは、イスラエルの民が旅の途上で経験したことは、この時代に生きる人々、すなわち世の終わりが臨んでいる人々の益のために記録されたのだと、はっきり述べている。私たちは、自分たちに迫る危険がヘブライ人のそれよりも少ないとは考えない。むしろ、より大きいと考える。Healthful Living, 280, 281.

エジプトからの解放はエペソの教会によって表されており、その歴史におけるエペソの教会の象徴はヨシュアであった。神がエジプトから導き出した者たちが十度にわたる試練に失敗した後、主は反逆者たちから契約を取り上げ、それをヨシュアとカレブに与えた。

彼らに言え。「主は言われる。わたしは生きている。あなたがたがわたしの耳に語ったとおり、わたしもあなたがたにそのとおり行おう。あなたがたの屍はこの荒野に倒れる。二十歳以上で、総数に数え入れられ、わたしに逆らってつぶやいた者は皆そうなる。あなたがたは、わたしがあなたがたをそこに住まわせると誓ったその地に、決して入ることはない。ただし、エフンネの子カレブとヌンの子ヨシュアは別である。」民数記 14:28-30.

ホワイ夫人は、ヨシュアとカレブは「世の終わりが臨んだ者たち」すなわち「いけにえによって神と契約を結ぶ者たち」を代表していると指摘している。

世の終わりが臨んでいる私たちの戒めのために、この歴史は記録された。今日の神の民はいかにしばしばイスラエルの子らの経験を繰り返していることか！いかにしばしば彼らはつぶやき、不平を言うことか！主が前進せよと命じられるとき、いかにしばしば彼らは退いてしまうことか！神の大義は、カレブやヨシュアのような、忠誠と揺るがぬ信頼を備えた人々の欠如のために苦しんでいる。神は、ご自身の霊に満たされるために自らをささげる人々を求めておられる。キリストと人類の大義は、聖められた自己犠牲の人々、辱めを負って宿営の外へ出て行く人々を求めている。彼らが強く、勇敢で、尊い事業にふさわしい者となり、いけにえをもって神と契約を結ぶように。Review and Herald, 1902年5月20日。

更新される契約は、ヨシュアとカレブとの契約が新たに結ばれたことで表されているように、14万4千人と大群衆との契約である。元の契約の選民が神から離縁され、荒野で死ぬよう定められた後に、それは更新される。14万4千人との契約は、かつての選民が退けられるまさに同じ歴史の中で成就する。

エペソは「望ましい」を意味し、ヨシュアと初代教会が成し遂げた働きは「望ましい」ものであった。ヨシュアが神の民を約束の地へ導いたとき、彼は征服しつつ前進した。第一の封印はエペソの教会に対応しており、征服して出て行く白い馬によって表されている。これはヨシュアにも使徒教会にも当てはまる。第一の封印は、古代イスラエルと現代イスラエルの双方において、エペソの教会に対応している。

スミルナという名は、死者の防腐に用いられた油である「没薬」に由来する。第二の封印は赤い馬によって表され、その馬には「大なる剣」と「地上から平和を取り去る」力が与えられた。これは、その歴史の中で人々が「互いに殺し合う」ことを意味していた。第二の封印はスミルナの教会に並行しており、神の敵に与えられた、彼らが神の民に打ち勝ち、これを殺すことを許す権威を表している。これは使徒教会に続く時代において、また士師の時代の歴史において成就した。いずれの歴史においても、神は神の民の外にある勢力が戦争と死をその民にもたらしことをお許しになった。使徒教会においては、その戦いの動機はキリスト教の拒絶にあった。直前のエペソの時代には、福音を世界に運ぶ中でキリスト教は無敵であったからである。士師の時代における神の民の敵の動機も直前のエペソの時代に基づいており、その時代に神は、エジプトと、その後ヨシュアを用いて征服させた諸国に対して御力を示された。第二の封印は、古代のイスラエルと現代のイスラエルの双方において、スミルナの教会と並行している。

ペルガモスは「要塞化された城砦」を意味し、したがって王の城を象徴する。第三の封印はペルガモスと並行しており、神の裁きに対抗して地の王たちが人間の裁きを行う歴史を表す。したがって、「小麦」「大麦」「油」「ぶどう酒」を量る「二つ」の秤によって表される計量、すなわち裁きは、王権という人間の権威を指し示すが、それは神の裁きに照らすと常に欠陥がある。正直な計量には二つの秤は必要ないことを覚えておきなさい。二つの秤は不公正な裁きを表す。

「大麦」は過越祭における「初穂」のささげ物の象徴であり、「小麦」は五旬節の祭りにおける「二つの揺り動かしのパン」のささげ物の象徴である。「油」は聖霊の象徴であり、「ぶどう酒」は教理の象徴である。古代イスラエルにおけるペルガモとは、過越祭から五旬節に至る季節によって表される神の礼拝制度に裁きを招いた、妥協的なイスラエルの王たちの時代である。神の言葉の真理は「ぶどう酒」と「油」で表される。古代イスラエルでも現代イスラエルでも、ペルガモの教会の時代は、スミルナに代表される歴史において流血によっては成し遂げられなかったことを、サタンが達成しようと企てる時期である。ペルガモにおいてサタンは、スミルナで示されるような流血によってではなく、妥協によって神の民と神の真理を滅ぼそうとした。古代イスラエルの王たちの妥協は、現代イスラエルにおけるコンスタンティヌスの妥協を象徴している。

テアティラは「痛悔のいけにえ」を意味し、御名のために殺される神の民に神が与える殉教の霊を語っている。痛悔のいけにえは、七十年の捕囚の間にダニエル、シャドラク、

メシャク、アベド・ネゴによって示されたように、苛烈な状況下でキリストに仕える意志を表しており、また、一千二百六十年の歴史の間に教皇権によって拷問され、投獄され、中傷され、殺されたワルド派、ユグノーおよびその他の人々の犠牲も表している。第四の封印はテアティラの教会と並行しており、古代イスラエルに対する古代バビロンの迫害と、現代イスラエルに対する現代バビロンの迫害を表している。両方の捕囚の歴史は、まず真理からの背教を必要とし、それはイスラエルの王たちとコンスタンティヌス帝によってもたらされた。どちらも、テアティラに象徴される時期への道を備えた。

サルディスは名を公言してはいるが、その名に見合う実体がなく、その公言は偽りである。シェキナの臨在は第二神殿には決して現れなかった。キリストの臨在は、サルディスの歴史の中には決して現れなかった。暗黒時代の改革は、本質的には、一歩進んでは二歩下がる連続であった。プロテスタント宗教改革においてサルディスの歴史が成し遂げるはずだった働きは、最後まで成し遂げられなかった。

フィラデルフィアは「兄弟愛」を意味し、まず神を愛さなければ兄弟を愛することはできない。

もし「私は神を愛している」と言いながら、兄弟を憎む者がいれば、その者は偽り者である。見ている兄弟を愛さない者に、見たことのない神をどうして愛することができようか。神を愛する者は兄弟も愛すべきだというこの戒めを、私たちは彼から受けている。ヨハネの第一の手紙 4:20、21。

フィラデルフィアは神を愛する教会を表しており、そのためフィラデルフィアに対しては非難も叱責も下されていない。

また、フィラデルフィアにある教会の御使いに書き送れ。聖なる方、まことの方、ダビデの鍵を持ち、開けばだれも閉めることができず、閉じればだれも開くことができない方が、こう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。見よ、わたしはあなたの前に開かれた門を置いた。だれもそれを閉じることはできない。あなたにはわずかな力しかないが、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。見よ、サタンの会堂に属し、自分たちはユダヤ人だと言いながら実はそうではなく、偽っている者たちを、わたしはあなたの足もとに来てひれ伏させ、わたしがあなたを愛したことを彼らに知らせる。あなたがわたしの忍耐の言葉を守ったから、わたしもまた、地に住む者たちを試すために全世界に来る試練の時から、あなたを守る。見よ、わたしはすぐに来る。今あなたが持っているものを堅く保て。だれにもあなたの冠を奪われないように。勝利を得る者を、わたしの神の宮の柱とする。彼はもはや二度とそこから出て行くことはない。わたしは彼の上に、わたしの神の名と、わたしの神の都の名、すなわち、わたしの神のもとから天から下ってくる新しいエルサレムの名を書き記す。さらに、わたしの新しい名を彼の上に書き記す。ヨハネの黙示録 3:7-12。

フィラデルフィアには「ダビデの鍵」が与えられており、古代イスラエルにおけるフィラデルフィアの歴史では、彼らにはダビデの子が与えられた。この「ダビデの子」は、ほかのことの中でも特に、アルファでありオメガである、最初であり最後であるという予言的原則を表している。その鍵は「歴史主義」という方法論を表す。古代イスラエルの終焉期に相当するフィラデルフィアの教会の時代には、聖書予言のまさに著者ご自身が鍵

であった。ミラー派の歴史においてフィラデルフィアの教会が表す時代には、ウィリアム・ミラーにその鍵が与えられた。これら二つの歴史において、キリストは自分たちはアブラハムの子孫だと考えていたが実際にはそうではなかったユダヤ人と向き合われ、ミラーは自分たちは霊的なユダヤ人だと考えていたがそうではなかったプロテスタントと向き合った。

耳のある者は、御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。ヨハネの黙示録 3:13

ラオデキアは「裁かれた民」を意味し、ラオデキア人、すなわちキリストの時代のユダヤ人は、紀元70年のエルサレム滅亡の際に最終的に裁かれた。背教的プロテスタントに対する最終的な裁きは日曜法の危機において行われるが、彼らは1844年の春に第一の天使のメッセージを退けたときに裁きを受け、そのとき神によってバビロンの娘たちと宣告された。そうした墮落したプロテスタントたちは、調査審判の終わりの時におけるラオデキア的アドベンチズムを象徴している。

私たちはこれまでに、黙示録の七つの教会が預言的象徴として正しく理解され、その後預言的に適用され得るいくつかの異なる方法をおおむね検討してきた。しかし、それらは「最高の権威によって私たちに与えられた」預言の規則という枠組みの中で理解され、適用されなければならない。

七つの教会へのメッセージは、ヨハネがそれらを記録した時、実在していた七つの教会に与えられたものであった。七つの教会へのメッセージは、歴史上のすべての教会に対する教えと警告を与えている。七つの教会へのメッセージは、歴史を通じて個々のクリスチャンに対しても教えと警告を与えている。七つの教会は、使徒時代から世の終わりに至るまでのキリスト教史を表している。七つの教会は、モーセの時代から西暦70年のエルサレムの滅亡に至るまでの古代イスラエルの歴史を表している。七つの教会については、最初の四つの教会と最後の三つの教会の違いを見極めることで、認識し適用できる。

私たちが特定している六種類の預言的適用と同じ適用が、七つの封印に表されています。次の記事でこれらの真実を取り上げます。